
Gundam Generation Novel -不死鳥の描く軌跡-

ムラキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gundam Generation Novel - 不死鳥の描く軌跡 -

【Nコード】

N2063P

【作者名】

ムラキ

【あらすじ】

2xxx年、とある奇跡から導き出された技術により、人類の文明レベルは大きく進歩し、宇宙進出を可能にしていた。しかし、どれだけ技術が進歩しようとも人間は愚かなままで、新たな火種がくすぶり、物語が動き始めていた。

これはオリジナルの世界観で、オリキャラを主人公として、ガンダムシリーズの登場人物達と時には一緒に力を合わせて活躍し、また敵として対峙したりするお話です。このお話の中に出てくる

ガンダムの登場キャラクター達は、性格や立場が違ったりしますの
でご注意ください。

また、ほぼ全てのガンダム（A G E以外）を網羅していないと理解
不能な点、またネタバレになる点もあるので、ご了承ください。

序章 ―革新の兆し―

人は宇宙のことについてどれだけ知っているのだろうか？

宇宙はなぜ生まれ、存在しているのか……？その問いは遙か昔から議論されているが、未だに答えにはたどり着いていない。

しかし、そんな中で一つ確かなことがある。それは人間が宇宙服なしでは宇宙で生きていけないということ。

人は宇宙から拒絶されている。そう、僕が今の社会から拒絶されているように。そんな取りとめもないことを考えながら、僕はシャトルの中で座ってじっと打ち上げの時を待っていた。

今僕は、宇宙に飛び立とうとしていた。

2 x x x 年、宇宙旅行が21世紀初頭の海外旅行並みの料金で行けるようになった時、母さんがたまたま応募した懸賞で初のフライト搭乗の権利を当てた。

最初はどうか迷ったが、旅行会社側も全面的にバックアップしてくれるということで話しはまとまり（たぶん、旅行会社側にも誰でも宇宙に行けるという宣伝になるという魂胆もあるのだろう）こうして僕たち家族は、世界初のツアー型宇宙旅行に行くことになった。いくつかの訓練を受けたり（僕の場合は特に念入りに）、いろいろと検査を受け、ようやく出発まで漕ぎつけた。

「ほら、そろそろ出発みたいよ！」

「こらこら、ちょっとは落ち着きなさいな」

凄く興奮している母さんの隣で父さんがたしなめている。

子供っぽいところのある母さんに、普段は物静かだけど頼りがいのある父さん。息子である自分から見てもなかなかお似合いなカップルだと思う。

それだけに、自分みたいな子供を授かってしまったのは不幸と言っただけだろう。

それでも二人は泣き言や恨みごとひとつ言っただけではないけど……。そんなことを考えていると、出発のアナウンスが響き、窓にシッターが降りる。

静まり返るシャトル内。そしてカウントダウンが始まり、10から0になり……

ズウー……ン!!

もの凄い音と共に、かなりのGが体に押し掛かる。それでも昔のロケットの何分の1の負荷らしいが、それでもきついものはきつい。僕は顔からにじみ出る汗を不快に思いながらも歯を食いしばってなんとか耐え抜いた。

そして……

「わぁっ、凄い!」

窓のシッターが開くと、そこからは地球が見えた。青い星、地球。そんな使い古された言葉が僕の心の中に浮かんできた。

なんて、なんて綺麗なんだろう……。しかし、その後さらに別の感情で僕の気持はいっぱいになった。

それは意外なことに、なつかしさだった。初めて来たはずなのに、なんだか僕はずっとここ宇宙で生きていたかのようだ。

そんな不思議な感覚が自分だけのものなのかを父さんや母さんに聞こうとした瞬間、事態は急変した。

ビーーーーー！ビーーーーー！

けたたましい音をたてて船内に響き渡る警報。そして大慌てで駆けまわる（というより飛び回る）フライトアテンダントの人達。

「な、なんなの！？」

まわりがざわめく中、動揺する母さんと、落ち着いた様子で僕と母さんのことに気を配る父さん。

そして次の瞬間……

メキッ！メキメキメキッ！！

急に船体が悲鳴を上げ出し、そして目の前の席が突然消えた。

「えっ？」

僕は体を硬直させながらも頭の方は直ぐに前の席がどこに行ったのかに気付いた。そう、前の席は、というよりシャトルの前半分が折れてしまったのだ。それがどんな原因かはわからない。とりあえず、今の現実には、船体が折れたということ、つまりシャトルが壊れ、さらにシートベルトがちぎれ、僕の体は外に放り出されたということだ。

そのような思考を走馬灯並みの速さで巡らせながら、最後には死という文字が頭の中に浮かんでどんどん埋め尽くしていった。

（ああ、もうだめなのか……）

そんなことをかすかに考えながらも、それでもいいかな、と思っ
てしまった。

どうせ長く生きててもあんまり有意義な人生を送れそうにないし、
宇宙の藻屑に消えるのもそれはそれで豪勢かな……なんて思ってい
ると、目の前に父さんと母さんが未だにシートベルトに繋がれて席
に縛り付けられている姿が見えた。

人間は生死の境目の時に本性が出ると言われているが、それは本
当らしい。なぜなら、父さんと母さんは今まさにその命綱であるは
ずの（まあすでに船体が壊れているから無意味と言えば無意味なの
だが）ベルトをはずして、船体から放り出されながらもこちらに手
を差し伸べてきたからだ。

その瞬間、自分でも驚くぐらい強く、激しく、救いたいと思った。
地球にいる幼馴染の娘にこのことを言ったら「もう、あんたの家
族はそろって！」とあきれられそうだが、僕にとっては自分みたい
な子供を育ててくれた優しくて温かい、自分の身よりも大切な両親
だ。

僕は必死に手を伸ばそうとした。しかし、そこで思い出す。

そうだ、僕には手がないんだ……手だけじゃない、足もない。
それでも、こんな手も足もない僕でも……

「助けたいんだ!!」

後にその場にいた人は、全員僕の言葉が聞こえたと言っていた。
しかし、すでにほぼ真空状態だったあの場で僕の声が聞こえるわけ
がない。

そう、普通なら。

だけど、僕はあの時手を伸ばすことができた。本物の手ではない
けど、両親を救うことのできる手を……

日常とその終わり

「……そして、その後救助船に收容された人達は全員無事で、ビツクニユースになりました」

教壇の横に浮かび上がっているモニターに映っている当時の救援に同行していた記者が撮った写真を次々に切り替えながら、灰原朱雀はいばらすずことスザクは、最後の写真を写し終わると、いったん言葉を切つて、仕上げにかかった。

「その後、この船に乗っていた両手両足がない少年Aがこの奇跡の元であることが判明。そしてこの事件を期に発足した6名の天才科学者達から構成されたチームGUNDAMにより、その力の利用方法が導き出され、今日の発展に大いに貢献したのです。以上で終わりますが、何か質問はありますか？」

こんな授業でいちいち質問する奴なんていないだろう……いや、一人、あいつを除いて……なんてスザクが思っていると、案の定あいつこと鳳火乃香おおとりほのかのやつが手を挙げた。

「はい、どうぞ」

スザクが投げやりに言うと、ほのかは立ちあがり表情を全く変えず、淡々と質問をする。

「その発展と言うのは、具体的にどのようなものですか？」
（くつ、やっぱりつつこんできたか……というかこの中途半端な終わり方から間に合わなかったって察してくれよ……でも、このまま答えられないと単位が危ない！）

そう考えをまとめたスザクは、アドリブで思いつく限りのことを話すことにした。

「はい。一つには先天的身体障害者と言われていた人々の地位向上でしょう。あの力の発見のおかげで、大多数のかれらは宇宙に行くことにより、宇宙空間に適応した新たな能力が手に入れられることが分かり、さらに知能指数が低いと言われていた人々も、宇宙に行くくと重石をどかされたかのように素晴らしい能力を発揮し始めました。彼らは通称宇宙覚醒者と呼ばれ、今日までの宇宙進出に大いに貢献しています。」

それと一番大きいのはやはり戦争関係でしょう。昔はやれテロだやれ戦争で戦闘だ空襲だで何万という数の命が失われていました。しかし、今あの力から作られた簡易型バリアフィールド発生装置のおかげで大抵のことで命を落とすことはなくなりました。それにかのチームが作り上げたロボット、GUNDAMや、それを元に作られたMSも忘れてはいけません。あれらの登場のおかげで、宇宙において人類の行動範囲は格段にアップしました。以上でどうでしょうか？」

なんだか話しが前後したりして支離滅裂っぽかったけど、一応説明はしたぞ、的なオーラを出していると、通じたのかほのかは大人しく座った。

こうしてようやくスザクのプレゼンは終わったのだった。

- - - - -

「スザク、今日もゲーセン行こうぜ！」

授業が終わった後、シンがスザクをいつものメンバーでの寄り道に誘う。

「わりい、ちよつと用事があるから、また明日誘ってくれ」

「そつか……、じゃあ、明日な。絶対逃げるなよ。この前の対戦、まだ決着ついてないんだからな」

と、冗談半分で拳を突き出す。

「お兄ちゃん〜！」

スザクが拳をこつんと突返すと、その時シンを呼ぶ声がした。

「なんだよマユ。わざわざクラスにまで来て？」

シンが「じゃあなっ！」と言って、教室の扉の前に立ってシンを呼ぶ彼の妹のマユのところまで駆け足するのを見送ったスザクは、とりあえず次にほのかを探すことにした。

クラスメイトが部活やら放課後遊びに行くのに集まっているなか、あいつは一人さっさと荷物をまとめて教室を出て行くところだった。スザクも急いで机の上に置いてある鞆を取り、その後を追う。

スザクが追いかけて来るのを感じたのか、ほのかは立ち止まって後ろを振り返った。

「何？」

ほのかは追いついたスザクに一言だけそう言つとすぐにまた歩き

出した。どうやら歩きながら話せということらしい。

「いや、あんとき質問してくれてサンキューなって言いたかったんだけど……」

そう、最初はわざわざ質問するなんてなんだよと思ったが、よく考えてみるとあの質問がなかったらプレゼンは中途半端に終わって合格点をもらえたか微妙なところだった。

「別に、あなたやあなたのご両親には良くお世話になってるし、お礼を言われるほどのことじゃない」

完璧な無表情で淡々と呟く火乃香。

「クールだなあ。やつぱコーディネーターって言っても、いろんな奴がいるよな。シンとその妹のマユちゃんなんかは凄いいし、ヤマト先輩みたいに、温和な感じの人もしれば、お前みたいな無表情で何考えてるか全く分かんない奴もいるし」

「それはそう。コーディネーターと言っても、色んな人がいるのはあたりまえ」

ここで無表情の中に赤の他人にはわからないだろうが、少々付き合いの長いスザクにはわずかだがわかる感情が見えたと同時に、自分がまたヘマをやらかしたことに気付いた。

そう、それは苛立ちだった。まあでも、それは無理もない話だし。コーディネーターが認知されてから30年、遺伝子を人為的にいじるということではなかなか議論や差別があつたらしい。

いや、現在進行形である場所にはあるらしいが……（ここオーブ直轄コロニーヘリオポリスでも、時々下世話な3流番組でコーディネーターに対するあけすけな批判が報道されることもある）

しかしそれでも、普通はまったくいいほど皆無だ。そして、当然スザク自身もそんなつもりで言ったわけではない。

「いやあ、ごめんごめん。別にそんな悪い意味で言ったんじゃないんだけど……」

「謝らなくても大丈夫。あなたの性格はよく知ってるから」

（それは俺が考えなしってことを言いたいのか……）

「そんなに怒るなよお。……よしっ、わかった！ 帰りにお前のお気に入りシュークリーム買ってやるから」

その言葉に、ほのかはぴたりと立ち止まった。

「……いくつ？」

「はっ？」

「いくつ買ってくれるの？」

（や、やっぱりいくつも食べるのか……いつもは小食のくせに、甘いもの、特にシュークリームとなると鬼になるからなあ。これは俺の残り少ないこづかいがさらに崖っぷちに追い込まれそうだ……）

なんてことを考えながらも、その代償を払い見れるだろうほのかの笑顔のレア度は値千金とも言えなくもないかな……、と、自分を納得させて、ほのかに急かされつつスザク達は校門に向かった。

- - - - -

「こんにちは、セシリーさん」

スザク達は学校から徒歩数分のまだ真新しい街並みの中にある、とあるパン屋に来ていた。

「あら、灰原君、いらっしやい」

店の中に入ると、セシリーさんがまばゆいスマイルでスザクたちを迎える。

ここのパン屋兼洋菓子屋は1年ほど前にできたもので、セシリーさんとシーブックさんのアノー夫妻二人で経営している。

確かな味と、夫婦の接客のよさからなかなか繁盛している。かく言うスザクたちも常連さんで、結構親しくさせて貰っている。

そうこうしていると、店の裏からシーブックさんも出てきた。

「おっ、スザクじゃないか。ほのかちゃんも、いらっしやい。今日はデート?」

スザクは笑いながら、隣に立つほのかは無表情のまま、

「違います」

と、はつきりと答えた。

「……息ぴったりじゃないか?お似合いだと思っただけだなあ。まあ、それはおいおいなるとかなると思うことにするとして、今日はおつかい?」

「いえ、今日はこいつにシュークリームをおごりに」

「あら、やっぱりデートなんじゃない」

「だから違います」

「……………」

今回答えたのはスザクだけだった。

隣にいたはずのほのかはすでに窓際のいつもの席に座ってスザクをじっと見つめ、シュークリームと紅茶を運んでくるのを待っている。

「はいはい、ただいまお待ちしますよ、お姫様。それじゃあセシリさん、紅茶2つとシュークリームをとりあえず4つ……いや、8つください」

セシリさんから受け取ったトレーを持って席につくと、ほのかは上品に、しかし素早くという離れ業を駆使してシュークリームにとりかかる。

スザクは反対の席に座り、そのこの世の誰よりも幸せそうな顔を眺めながら、さつき冗談でもいいからデートだって言っておけばなんか変わったのかな、なんてことを紅茶を飲みながら思ったりしていた。

- - - - -

今の世界情勢は極めて複雑だ。

スザクのプレゼンの中で出てきた少年Aを皮切りに、人の文明は大きく革新した。MSの開発、4本の軌道エレベーターや多数のコロニーの開発など、それまでの技術では不可能だった発展がありえないほどの速さで行われ、文明の進歩を2世紀ほど縮めたと言われている。

それは時代が西暦から新暦である宇宙開拓世紀に変わってからも続いており、それに伴い今は昔のように国同士が争っているだけと

いうわかりやすい構図は無くなってしまった。

大まかにまとめると、まず地球の多数の国家が所属している地球統一連合（内部には多数の派閥があるらしい）と、それに属さない小さな国家連合などが地球に存在し、宇宙には地球から移民してきたコロニーに住む人々、宇宙に適応するために遺伝子操作されたコーディネーターが多く住むプラント、月のムーンレイスやその他ジャング屋同盟などの様々な組織が存在し、小競り合いや小規模な紛争、戦争などを行っている。

また、宇宙覚醒者のみで構成された組織も存在するらしいが、それは一般人が知れるレベルのことではない。

そんな中、オーブは地球に国家を置く中立国（一時期連合とプラントの抗争に巻き込まれかけ、危うかったこともあるけど、何とか乗り切ってる。ちなみにその時に今スザクが親の仕事の都合で住んでいるここヘリオポリスも半壊している）なので、戦火やそういったいざござとは今のところほとんど無縁。

このままいけば自分には平穏、いや、平凡な人生が待っているだろう。

そんなわけで、今のところスザクは目の前にいるこの幼馴染と呼ぶにはまだそこまで古い付き合いではなく、かといって他人とかお隣さんやクラスメイトで片付けられるほど短く薄い付き合いではないほのかのこのことを気にしていられるのだった。

そう、最近スザクはほのかとの距離を測りかねていた。いや、正直に言うと、この無愛想で無表情な女にスザクは結構惚れていた。

まあ最初会った時は、なんだこの能面女は？と失礼なこと思ったが、あることをきっかけによく一緒にいるようになり、次第に彼女の魅力が見えてきたりして、気付いた時には手遅れだったわけだ。

しかし当のほのかは無表情のポーカーフェイスで、彼女が自分の

ことをどう思ってるのか皆目見当がつかない今、スザクはとりあえず一緒にいられる現状で満足してることにしていた。

そんなことを考えながら、ほぼ無言なティータイムを一時過ごした後、スザクたちは帰ろうとした（もちろん家で食べる用のシュークリームも買わされた）が、その時けたたましいサイレンがコロニー中に響き渡らせるかのごとく鳴った。

そして、スザクの平穏な日常とその後が続くはずだった未来は、この時を境に瓦解し一変した。

日常とその終わり（後書き）

更新は不定期ですが、気に入っていただけたらまた読んでください。

不死鳥との出会い

「これは！？」

シーブックさんが急いでカウンターの裏から飛び出して外に出た。その後、遅れてスザクとほのかも続く。

そして外で最初に見たものは、遠くの方で燃え盛る炎とその上で踊るように空を舞う数機の機影だった。

「あれは、ザフトのジンと統一連邦のダガー、それにジオンのザク……全て旧型？迎撃には防衛部隊のシビリアンアストレイが出る……」

火乃香は手に持った携帯型デバイスのモニターを展開して戦闘を繰り広げている機体の情報を読みあげた。

「連邦にザフト、それにジオンだって！？ここはいつからそんな色んなところから攻められるようになったんだよ！」

スザクはわけがわからず混乱してしまった。この国では戦争はないとさっきまで思っていたのに、これじゃ飛び火どころか戦火の真ただ中じゃないか！

バチンッ！

呆然と突っ立っていたスザクの頬をほのかが思いつき叩いた。

「おちついて……」

最初は反射的に喰ってかかろうとしたスザクだったが、それぐらいしないと立ち直れないくらい動揺していたことに気付き、すぐに気を静めた。

「帰ろう」

スザクは小さく呟き、ほのかの小さな手を握り駆けだした。

その時に後ろを振り返っていれば、店の前にいたはずのアノ夫妻の姿が見えないことに疑問を持ったかもしれないが、その時はスザクにそんな余裕は欠片も無かった。

- - - - -

スザクたちは家に一旦帰ろうとしたが、途中で近くのシェルターに避難せざるおえなくなった。

すでに守備側のアストレイが港口から撤退を余儀なくされ、市街地ぎりぎりまで防衛ラインが下がってしまったていたからだ。

ものすごい熱風を伴いながら撃ちだされるダガーのビームライフ。いくら簡易型バリアフィールドを持っているからといっても、何回も直撃を喰らえばどうなるかわからない。

なので、スザクたちはとりあえず近場のシェルターに退避することにしたが、走っていると運悪くいきなり大型トレーラーが角を曲がってきた。

しかもジンに追走されている！

そんな時に出会いがしらにスザク達がいて、反応が遅れたのかトラックは上手く避けられずバランスを崩し、もの凄い音を立てて横転してしまった。そして放り出された荷物からカバーがはずれ、中

身が曝される。

「なんだ、これ……？」

それは、巨大な戦闘機だった。それもスザクが今まで見たことのないタイプの。

戦闘機にしては大きすぎるし、良く見る宇宙用の戦闘機には普通無い羽が付いている。もしかするとモビルアーマーと言う奴かもしれない。色は白と赤を基調にしていたかなり目立ちそうだ。

そんなのんびりした分析も、ほのかに手を引っ張られて機体に向かった瞬間に吹っ飛んだ。

「おいっ！ いったい何しようってんだよ！？」

スザクは何となくわかりながらも一応聞いてみた。

「あの機体でここを離脱する」

「んな無茶な！？」

スザクが直ぐに手を引っ張り返そうとしたが、ほのかが指差した方向を見て愕然とした。トラックが横転していてシエルターの入口が潰されていた。

「わかった！でも、お前操縦なんて出来んのか？」

「できる……だぶん」

「たぶんかいっ！？」

しかしツツコンだ彼に出来るかと言えば、答えはN oだ。

もちろんスザクも学校で小型宇宙船や作業用モビルスーツ、ジムの操作訓練を受けているし、ゲーセンでも良くリアルな戦争ゲーム

で遊んでいたが、こんな状況でいきなりは無理だ。

（とりあえず、ここは一か八か火乃香のやつに任せるしかない。）

トラックの護衛だったらしいシビリアンアストレイがジンを防いでくれているおかげで何とか二人は無事に機体までたどり着き、早速乗り込んだ。上手い具合に2人乗りだったので席の心配はない。

ほのかが前、スザクが後ろに乗ると、ハッチが自動的に閉まった。起動前で真っ暗な端末に次々と光が灯り、文字が浮かび上がってくる。そしてそして最後に、「P H O E N I X G U N D A M Z E R O - 2 n d」という文字が現れた。

「フェニックスガンダム？」

スザクがそれを読みあげると同時に、

「出る」

と、短くほのかが言ったと思うと、急に真っ暗だったウィンドウが外の様子を映し出し、そして上昇し始めた。

その時ちょうど援軍に駆けつけてきたらしい新たなジンが、アストレイを挟み撃ちにして撃破したところだった。

2体のジンのモノアイがこちらを向き、脚部に装備されているポッドからミサイルが一斉に撃ち出された。

「げっ……」

（避けられるのか？）

スザクは思考が停止して動けなかったが、ほのかはモニターから目を離さなかった。

「舌嚙まないでね」

スザクが返事をする暇もなく、ほのかはスロットルを全開まで入れる。もの凄いGと共に、ジン達からどんどん遠ざかっていく。

スザクは目の前に映るモニターの映像でミサイルがあさつての方向で爆発するのを見ながら、意識を失っていった。

- - - - -

「冷てっ……」

スザクの起きてからの第一声はそれだった。起きて辺りを見回してみると、そこはスザク達の学校の体育館だった。すぐ近くにはさっきの機体が置かれている。

上に青空が見えるのは、機体を天井から入れるために作られた穴の為らしい。

「あれを晒しておくのは危険」

そう言いながらほのかはスザクの額から落ちた濡れたハンカチを拾い、機体にかけて干した。

（俺、気絶して……？ほのか、介抱してくれてたのか？）

「はい、これ」

そう言って手渡されたのは学校の購買でよく見かけるパンとジュースだった。

「お金は後で払う」

どうやら無断で持ってきたらしい。まあこの状況で金のことはとやかく言われまい。スザクはそのことよりも、至れり尽くせりで何もしていない自分が情けなくなった。

しかし腹は減っていたので、とりあえずありがたく頂くことにした。

「それで、状況は？」

ほのかはとつとつと話したが、その内容は芳しくなかった。

今のところ、市内は壊滅状態な上、ジャマーやミノフスキー粒子が戦闘レベルの濃度でかかって連絡は不可能。

さらにまずいことに、この機体はオーブ軍の最新鋭機らしく、最高機密に属するらしい。

「こんなものを持ってたら……」

「確実に狙われる……」

「「はあ……」」

最後の溜息は同時についてしまった。しかしそんな一時の考える時間も天は俺たちに与えてくれなかった。

ズドーーーーッ！

もの凄い爆発音と共に体育館の一角が崩れ落ちた。スザクはとっさにあいつに飛びかかり、何とか押し倒して機体の影へと隠れた。背中をひりひりと熱風が焼いたが、何とか下敷きにしたほのかは守り切れた。かく言うスザクも怪我は特にしてないみたいだ。

体を起してそれを確かめていると、ほのかはすぐに立ちあがったかと思ったら、いきなりスザクを抱え上げコックピットに放り込んだ。

「どわあっ！？いててっ……何すんだよ！？」

スザクが思いっきりぶつけた後頭部の痛みをこらえながらなんとか声を絞り出すと、すでにあいつも席についてシステムを立ち上げているところだった。

そしてモニターが出るとそこには2機のジン、1機のダガー、そして3機のザクがスザク達を捕捉している。

スザクがすぐさま席にちゃんと座ると同時に、ほのかは機体を発進させた。

その瞬間、敵機からの一斉射撃！

今のところランダム回避で何とか避けられているが、撃ち落とされるのは時間の問題だ。そんな時、何かないのかと探していた俺は手当たり次第にモニターを操作して、うっかりMODE CHANGEというボタンに触れてしまった。

その瞬間、

「な、なんだこりゃ！？」

「っ！？」

スザクは驚きの声を、あいつは声には出さなかったが、同様に驚

「ちよつ、ちよつとたんまー！ー！？」

スザクは何とか機体を上昇させようとグリップを握るが、どうやら逆効果で突っ込むスピードを速めてしまったらしい。

しかし幸運にも、この特攻には敵も驚いたのか、砲撃を弱めて一時後ろに後退して距離を取る。

その一瞬のすきを待っていたのか、ほのかはカチャカチャと音が聞こえるくらいの素早さでキーボードを叩きはじめた。そして、翼が展開したかと思うと、その先から無数の小型の羽のような物体が射出された。

「フェザーファンネル。これで、何とか逃げ切る……！」

「ファ、ファンネルって確か、覚醒者とかニュータイプにしか使えないんじゃない？！」

ファンネル、無線式の小型ビットを操り、オールレンジ攻撃ができる特殊兵装のことだ。確か前の戦争でキュベレイという機体が装備して、無類の強さを誇ったらしい。しかし、ファンネルにはニュータイプと呼ばれる人種や、宇宙覚醒者しか使えなかったはずだ。

しかし、実際に無線式のビットが敵に多方向からビームの雨を降らせている。理屈はわからないが、これなら……

「倒せる！」

スザクは希望を見出した声で叫んだ、が……

「無理。足止めにしかない……」

ほのかの一言で現実に戻された。

最初の不意打ちでジン1機を行動不能に、ザク2機の手足を吹っ飛ばした……のだが、いかんせんファンネルのスピードが遅く、直ぐに体勢を立て直した相手は、次々とファンネルは撃墜していった。すでに3つ墜とされている。

（このままじゃやられる！？）

「だから……早く逃げて」

ここでようやくほのかの声が少しづらそうな感じに気付いた。いつもならどんなに辛くても痛くてもポーカーフェイスを貫き通しているのに、今はモニター越しにでもわかるくらい苦しげな表情を滲ませている。

「お、おいつ、大丈夫か！？」

スザクが叫ぶと同時に、さらに4つのフェザーファンネルが撃ち落とされた。

残り3つ……

「早く……離脱、して……」

スザクは何とか心を落ち着かせ、操縦桿を握りしめた。しかしそんな大きな隙を敵が見逃してくれるはずがなく、残っていた敵が一気に飛びかかってきた！

（逃げ切れるか！？）

スロットルを全開にして一気に逃げきろうとしたその瞬間！

ズドーーーーン！

目の前まで接近していたジンとザクの手がヒートホークと剣ごと吹き飛ばされた！？墜落していく2機に気を取られたダガーは、頭を撃ち抜かれ同じ道をたどっていく。

スザクは何が起こったのかわからずスロットをにぎったまま一瞬動けなかったが、直ぐに自分の背後の画像を呼び出す。

するとそこには1機のマントをした正体不明のモビルスーツらしき影があった。さらに拡大してその謎の機体を注視しようとした瞬間……

「な、なんだ！？」

急に機体の下に引きずられ始めた。慌てて下を見ると、そこには絶望的な光景が広がっていた。

「あ、穴が……そ、そんな、うそだろ……？」

コロニーの大地を構成する側壁に、巨大な穴が開いていたのだ。

漂流・救助・襲撃

「やばい！やばい！！やばい！！？」

謎のMSが撃ち墮とした敵がコロニーの壁にぶつかりできた穴、それにどんどん吸い寄せられているのをなんとかして避けようと、スザクは先ほどから機体を動かそうとしているのだが……

「なんで……なんで動かないんだよ！？」

操縦桿を握ってもピクリとも動かないし、モニターに至っては外の景色を映すだけでそれ以外はウンともスンとも言わない。

そしてとうとう、何もできないまま機体が外に吸い出され、宇宙へと放り出されてしまった。そのまま姿勢制御もできずに、機体はゆっくり回転しながらコロニーからどんどん離れていく。

「くそっ、どうすりやいいんだ……」

コンソールを叩きながら悪態をつくも、それで状況がよくなるわけではない。

しかし、わかっていてもノーマルスーツすら着ていないので、この狭いコックピットの中では他にどうすることもできない。

さらに気がかりなのが、先ほどから返事の返ってこないほのかのことだ。戦闘が終わってから何度も呼びかけているのに返事がなく、代わりに苦しそうな息遣いが聞こえてくるだけで、どう考えても早急に病院へ運ばないとまずい状態だ。

「なにも……なにもできないのかよ……！」

スザクの呟く言葉が虚しくコックピットの中に響き、絶望に浸っている……

ガクンッ！

「な、なんだ！？」

突然機体に衝撃が走った。デブリにでもぶつかったのかとスザクが慌ててモニターを見ると……

「パイロット、生きてるか！？」

接触通信で流れてきたのは勝気そうな女の子の声だった。

「せ、戦闘機！？」

いつのまに接近していたのか（まあレーダー類もダウンしていたので、気づかないのも仕方ないことかもしれないが）赤と青のコントラストが派手な戦闘機がワイヤーを射出してフェニックスを牽引しているのだ。

「な、あんた誰だよ、いったい！？」

スザクが慌てて尋ねると、訝しむ様な声が返ってきた。

「子供……？まあ、いいや。それより、あんたの機体は狙われてるから、こっちで一旦回収するよ。しっかり掴まってな！」

「え、ちよつとま……」

スザクは訳が分からず詰問しようとしたが、次の瞬間襲いかかってきた凄まじいGにより意識が遠のき、本日二度目の気絶をしまった。

- - - - -

「……で、こいつはただの一般人なの、ドクター？」

「ああ。コロニーのデータベースにも名前がある。あっちのお嬢さんはコーディネーター、それも少々特殊な部類に入るらしいが、それでも軍属ではないな」

「へえ、特別か……まあでも、だからって民間人が乗ってるってのはやっぱり変だよな。だいいち、機体を起動できるわけないし……」

頭がぼおつとする中、重い瞼を何とかうつすら開けると、目の前に白い天井が広がっていた。

「あ、起きたみたいです」

白い天井という味気ない景色に、いきなり女の子の顔がどアップで割り込んできた。

透き通るような白い肌に、腰まで伸びている茶みがかった黒髪の少女がくつきりとした大きな瞳でスザクの顔をシゲシゲと覗き込む。スザクと目を合わせること数秒、彼女は近くで話している人達の方へと駆け寄っていった。

「……は……？」

スザクがダルイ体を起き上げると、手に点滴が繋がれているの

に気付いた。

「それは唯の栄養剤だ。別に変な薬ではないので安心したまえ」

金髪を短く切りそろえ、メガネをかけ白衣を着た学者然とした男がマグカップを片手にこちらに歩み寄ってきた。

「私はテクス・ファーゼンバーグ、この艦のドクターだ。ま、コーヒーでも飲むといい」

スザクは点滴を取り外されながら渡されたマグカップに言われるがまま口をつけた。コーヒーの程よい苦みが口の中に広がり、頭が覚醒しているのを実感する。

そしてその時やっと、隣のベットで眠っているほのかに気付いた。

「ほのか!？」

慌ててベッドから飛び降りようとして、コーヒーをこぼしてしま
う。

「あちっ!？」

「おいおい、大丈夫かよ？」

聞いたことのある勝気そうな声がドクターの後ろから聞こえた。
そこには短くさっぱりとした黒髪に元気いっぱいの猫のような輝きを宿した瞳、出てるところが出ているスザクと同じ年くらいの少女だった。

「ほらよ」

近くにあったタオルを手に取りこちらに放り投げてきた。

「あ、ああ……ありがとう」

スザクはこぼしてしまったところを拭きながら、その少女のことをじっと見つめた。

「ん、なに？」

「いや、もしかして俺たちを助けてくれた戦闘機に乗ってたのって、君かなって？」

その問いに対して、少女は胸を張って答えた。

「そう、あんたたちを助けたのはこのあたし、パーラ・シスが駆るGファルコンさ！よく感謝するんだよ」

「別にこいつらを助けたわけじゃないだろ。あくまでガンダム回収が依頼だったわけだし」

うつ……つとパーラの言葉を詰まらせたのは小柄な体躯に乱雑に切られた黒髪、抜け目なさそうながらもどこか気軽に接せられる雰囲気をしている少年だった。

「俺はガロード・ラン。この船、フリーデンの専属パイロットだよ。よろしくな」

スザクはタオルをいったん置き、差し出された手を握った。機械仕事をしているのか、固くてごつごつとした手だった。

俺の柔らかい手とは大違いだな……と思いながら、幾分余裕が出てきた中、スザクはドクターに静かに尋ねる。

「で、ほのかは大丈夫なんですか？」

ドクターは少し難しい顔をしたのを見て俺は息をのんだが、しかしドクターはすぐに少し笑って答えた。

「外傷はないが、極度に脳を使ったらしく疲労が激しい。ただ、命に別状はない。もう数時間もすれば起きるだろう」

その言葉にスザクはぷはーっと大きく息を吐いた。

「よ、よかったあ……」

（あ、やべ、涙でそう……）

スザクは慌てて気を引き締めて、自分を見ているみんなに向き合った。

「それで、最初の質問に戻りますけど、ここはどこですか？」

- - - - -

スザクとほのかが今いるのはフリーデンという船の中らしい。所属はジャンク屋組合で、ガロード達は付近を航行中にヘリオポリスのテロのことを聞きつけ、脱出ポットや簡易バリアフィールドに入っている人がいないかどうか搜索に来たそうだ。

その時、彼らの馴染みの傭兵部隊が、テロ組織が俺たちが乗っていた機体を狙っていることを知らせてきたそうだ。そしてその機体をテロリストたちに先んじて回収するのに協力して欲しいという要請が入り、搜索を始めた時にたまたまパーラが漂流しているスザク

達を見つけたそうだ。

「ちなみに、その傭兵部隊の方たちは信頼できる方達ですし、オーブから直接依頼を受けているそうなので、罾やテロリストの仲間という線はないと思います」

目が覚めた時に俺の顔を覗き込んでいた少女、ティファ・アディールが後からやってきたフリーデンの副官、サラ・タイレルさんのしてくれた説明に最後に付け加えた。

「で、これから俺たちはどうすればいいんですか？」

軍の最高機密に属する機体を見てしまったところか、あまつさえ操縦して戦闘行為をしてしまったのだ。

前大戦時の連邦などのエースのうちの何人かが、戦闘の場に居合わせた民間人の少年という都市伝説を聞いたことがある……

（俺たちも幽閉されるか軍属にさせられるか、あるいは最悪秘密裏に殺されるなんてことも……）

「それはどうなるかわかりません。ただ、せつかく助けた命をみすみす見殺しにしようとは思いません。できるかぎりのフォローをするつもりだから、安心して」

サラさんの言葉が不安に包まれた心を幾分楽にしてくれた。

「まあ大丈夫だろ。色々頑張っでごまかせば！」

「そのごまかすのが繊細な作業で大変なんだつつうの」

「なんだよガロード。じゃあ、あんたはその繊細な作業とやらができるのかよ？」

「うっ、それは……」

ガロードが言葉に詰まると、横からティファが口を挟んだ。

「ガロードに任せたら、力づくになっちゃうよ」

「ティファ」

「あはははは」

ガロードの情けない声と笑い声が病室に響く中、俺はちらりとほのかの寝顔を見つめた。

これからどうなるかわかんないけど……

（とりあえず、俺がしっかりしないと……）

心の中で固く決意をしたスザクは、話の輪に再び加わった。

「艦長、リ・ホームはあと40分ほどで合流できるそうです」

医務室からブリッジに戻ったサラは、副官席に備われた端末に指を滑らせながら、艦長席に座る男、ジャミル・ニードに次々に報告していく。

「ヘリオポリスの被害状況は港が半壊、工場や都市部もかなりの被害を受けたそうですが、幸い人的被害は出ていません」

「へー、あんだだけ派手に暴れてたわりに、意外と被害少ないんだね」

オペレーターを務めるトニアが不思議そうに呟いた。

「まあ敵の目的があのだんだ、攻撃は派手にやるだろうけどそれは全て揺動で、実際の被害はそんなに大きくないんだろ。これがコロニーの破壊目的だったらあれほど派手なことになる前に沈めてるだろうし」

トニアの疑問に的確に回答したのは人当たりがよく、戦艦を自分の手足のように操る操舵手のシンゴ・モリだ。

「そうだ。そして、旧式ながらもあれだけの戦力を揃えられ、あの機体を狙うということは……」

「まさか、どこかの組織か軍が関与している？」

サラがハツとした表情をし、クルー全員の顔が強張る。

「その可能性は捨て切れんということだ。そして、巨大な組織が関与しているのなら、このまま機体を見逃すことはしないだろう」
「っていうことは、この船今結構やばいってことじゃない！」

トニアの発言に、その場にいた全員が黙り込む。

「そんなのために、俺らがいるんだろ」

急に話に入ってきた声の主のほうへと全員が振り返る。そこには2人の男が立っていた。

「ちょっと邪魔するよ」

「あなた達、今は第2種警戒態勢だから、パイロットルームに居てって言わなかったかしら？」

サラが棘を含んだ声で言うと、後から入ってきたキザツぽい男、ロアビーが肩をすくめながら答えた。

「あんなところにいるても気が滅入るだけだし、それにちょっと気になることがあってね……」

「気になること?」

「オウよ」

最初に入ってきた男、喧嘩っばやそんな感じのウィッツが話しを継が、手に持っていたCD-ROMをトニアに手渡した。

「それは?」

「キッドがあのお子様たちが乗ってたガンダムを調べてたら、偶然見つけたんだけど、これがちょっとヤバイっぽいシロモノなんだよね」

いつもの軽いノリで話しながらも、真剣さを含んだ声はその場にいた全員を引き締めた。

「じゃあ、モニターに出すわね」

しかしトニアがCD-ROMを入れようとした瞬間……

ヴィー、ヴィー、ヴィー!

警報と同時に、船体の横をミサイルと粒子ビームが掠めていく。

「敵か!?!」

ジャミルが叫ぶと同時に、サラとトニアはそれぞれの席へ、ウィ

ツツとロアビイは地面を蹴り宙に浮かびながらドアを抜け、パイロットルームへと向かっていった。

「敵の所属と規模は？」

「敵所属……不明（unknown）！数は……ダガータイプのモビルスーツ20とアーケエンジェル級1、ドレイク級1です！」

「連邦か……？」

「警告もなしにいきなり撃ってくるなんて！？」

「隠密作戦にしては中々の数だな……シンゴ、逃げ切れそうか？」

「無理ですよ！急な召集で燃料も充分にありませんし、今は前回の仕事の為に機体を積めるだけ積んでいる上に、おまけのガンダムまで乗っけてるんですから！」

舵をめい一杯切って目の前に現れた中型のデブリを避けながら、今出せる最大速度でフリーデンを駆りながらシンゴは叫んだ。

「リ・ホームとの合流ポイントまでの時間は！」

「リ・ホームもこの宙域のミノフスキー濃度とジャマーに気づいてるでしょうから……ここはデブリが比較的に多い地帯なので、急いで合流しようとしても20分ほどはかかると思われます」

（20分……この艦に搭載されている戦力とデブリの多い地形を鑑みれば……）

ジャミルは思考を駆け巡らせ、一瞬の内に最善の策を叩き出した。

「よし、モビルスーツ部隊はGファルコンと共に出撃、リ・ホームと合流するまで時間稼ぎをしましょう」

「了解！パイロット、聞こえましたか！」

サラが耳につけたマイクに向かってしゃべると、モニターがついて格納庫が映し出され、そこにはロアビィ達がいた。

「こっちはガロード達がまだ来てないけど……ロアビィ、ウィッツと私は準備OKよ！」

サラの問いにテキパキと答えたのはノーマルスーツを着ているエル・エルだ。

「まったく、あの子たち、何してるのかしら!？」

サラが手元の端末を操ってガロード達の居場所を特定しようとした瞬間……

「わりい、遅くなった！」

大慌てで格納庫に駆け込んでくるガロード達の姿がモニターに映し出された。

「遅いじゃない！早くノーマルスーツを着て、出撃準備！」

サラは一喝した後、短く指示を出す。

「了解！」

「わかってますよっと！」

「すみません……！」

3者3様の答えを返して、急いでノーマルスーツを着るためにパイロットルームに駆け込んでいく3人。

「では準備ができ次第各機発進してください。その後はいつも通りの組み合わせで！」
「了解！」

その場にいた全員が答え、格納庫が慌ただしく動き始めた。

漂流・救助・襲撃（後書き）

不定期になると思いますがこれから更新していきますので、気に入っていただけたらまた読んでください。

戦闘01（前書き）

久々に更新です。

戦闘 01

「あの艦に例の機体が回収されたのは本当なんでしょうか？」

現在中立組織であるはずのジャンク屋組合に所属する艦フリーデンを強襲している部隊の艦の船長、ナタル・バジールが隣の席に座っている男、オブザーバーのムルタ・アズラエルに無表情のまま慇懃に尋ねた。

「五分五分といったところかな……。ですが、それで十分じゃないですか？ 所詮ヴァルチャー（ジャンク屋に対する蔑称）、墜としたところで、どうとでもごまかせるでしょ？」

気障っぽい仕草をしながらにやにや笑うアズラエルに対して、嫌悪感を出さないように気を付けながらナタルはさらに続ける。

「しかし、本当に先ほどご説明頂いたような機能を持った機体があるんでしょうか？ もしも……」

「あー、艦長、あなた達軍人の役目はなんでしたっけ？」

ナタルの言葉を面倒くさそうに遮ったアズラエルの問いに、ナタルは簡潔に答えた。

「任務を遂行することです」

その言葉に、アズラエルは皮肉を込めた笑みを浮かべた。

「そう、あなた方軍人は上からの命令に従えばいい。そして、この場合の上とは僕のことです」

「はっ！……心得てます」

「ならいいんですよ。あなたの腕は買ってるので、戦闘の方は全面的に任せますよ」

そしてアズラエルは言い終わると同時に徐に立ち上がり、まるで劇を仕切る監督のように大仰に手を広げた。

「さて、宇宙に巢食う宇宙覚醒者と、化け物どもを一掃できる武器を手に入れに行きましょうか！青き正常なる世界のために！！」

その言葉はブリッジに飛び交うクルーの緊迫した声の中、虚ろに響き渡った。

.....

「ハッチ解放、各機、準備でき次第発進しちゃっていいわよ！」

トニアの声を聞きながら、ガロードは機体のシステムの立ち上げが終わり出撃を待つばかりだった愛機GX-D（ガンダムXディバインダー）をカタパルトに立たせた。

「ガロード・ラン、GX、行くぜえ！」

勢いよく艦から飛び出したGX-D。

「ティファ・アディール、GFA（GファルコンAWACS）行きますー！」

続いてティファのGFAが宙へと飛び立つ。

「ティファ、ドッキングだ！」
「はい！」

ガロードの声に答え、ティファはGXと相対速度を合わせ、GFAを分離、GXを包み込むようにドッキングする。

「そんじや続いて、ロアビィ・ロイ、レオパルド、ちよっくら出てくるよ！」

「エニル・エル、GFB（Gファルコン・ブースト）行くよ！」

続いてロアビィとエニルペアも機体を駆り出す。

「じゃあ次、ウィッツ、しっかり仕事してきてよ」
「うるせえなあ。わかってるっつーの！ウィッツ・スー、エアマスタ―出るぜ！」

トニアに一言言われながら、続いてウィッツのエアマスターも戦闘機形態で出撃する。

「じゃ、ウィッツのことお願いね、パーラ」
「任せときなつて！GFC（Gファルコン・コンバット）パーラ・シス、出るよ！」

トニアとのやり取りを置き土産にパーラのGFも宙へと飛び立つ。

レオパルドはGFBと、エアマスターはGFCとドッキングし、展開する敵モビルスーツ部隊に突入していった。

- - - - -

「ティファ、ドッキング・アウトだ！その後は後方で支援してくれ！」

「わかった！」

ティファは応じると同時に機体をドッキング・アウトしてGFAをGXDから切り離し、後方に待機してAWACSの性能をフルに使って敵の情報収集を始めた。

「敵は高機動タイプの機体で編成されてます！火力はビームライフルのみみたいですけど、かなり高度な連携をとっているので、気を付けてください！」

「で、どう攻めるつもりだい？」

火力重視のGFCをエアマスターにドッキングさせて駆っているパーラが現場の戦術指揮官であるティファに尋ねた。

「3機とも右翼の敵に対して一斉射撃してください。その後、一気に右翼を切り崩して一時後退、牽制しながらリ・ホームとのランデブーポイントまで持たせてください！」

「なあーるほど。一気に攻めると見せかけて、持久戦に持ち込むってわけか」

「ま、確かにあいつらが加われば、相手の数が十倍だろうと負ける気はしないわね」

ロアビィとエニルも口々に作戦に同意していく。

「うし、火器の方は任せるぜ、パーラ！」

「おうよ！」

「そんじゃ、こっちもいきますかね、エニル！」

「ちゃんと狙って撃つてよね！」

「みなさん、後10秒で射程圏内に入ります！」

ティファの言葉を合図にGX-Dは背部に装着していたディバインダーを解除して手に持ちハモニカ砲形態にして構え、レオパルドはGFBとドッキングしたまま高速機動形態からMS形態に変形し体中にある砲門を開き、エアマスターは戦闘機形態のままドッキングしているGFCに搭載されている火器を起動させた。

- - - - -

「さて、なんとか持ちこたえられるかな……？」

ドクターことテクス・ファーズンバーグは医務室に備え付けてあるモニターを見ながら呟いた。

医者である身では戦闘には関われないが、自分の戦いが戦闘が終わった後にあるのを自覚しているので焦りや憤りは無い。

例え機体を破壊されたとしても簡易バリアフィールドを常備しているパイロットは死ぬことはほばありえない。問題は、発動するほど生命の危機に瀕しているわけでなく、かといって軽傷ではない時の場合だ。

しかし、生きてさえいれば何とかする自信はある。数十年前の戦争やテロによる被害者は即死やどうにもできないような重傷の患者がほとんどで、どれだけ医療が進んでいようと、どれだけ医者腕

が良かろうと問答無用の死か、良くても一生引きずるような怪我や欠損を押し付ける現場が普通だったか、今ではそんなことはほとんどない。

だからこそ、純粹に医者技量の問われるのだが……。

そんな考えに耽っていたためか……いや、彼も数多くの戦場やそれに準ずる場所で医療行為をしてきただけあって、危機察知能力は半端ではない。にもかかわらず、後ろに立たれたことに気付かなかったのは背後に立った人物の並みならぬ技量のためか、それとも……

ドクターは「ん？」と何かに気づき後ろを振り返ろうとしたが、すでに遅く手刀は的確な位置に当たりドクターの意識を刈り取った。

- - - - -

「ふー、やれやれ、新型のウィングダム20機を投入して、MS数機と戦艦1隻墮とせないとはねえ……」

アズラエルがやれやれといったように肩をすくめるのに対し、ナルは淡々と答えた。

「敵は先の大戦時に連邦が極秘裏に開発したワンオフの機体に乗ってます。加えて支援機体と合体して火器増強されており、なかなか手ごわくなってます」

「ま、言い訳づくりなら政治家でもできますけどね」

アズラエルが皮肉な笑みを浮かべ、続けた。

「君は軍人なわけだから、できませんじゃすまないんだよね」

「承知してます。そこでアズラエル司令、あの3機の出撃許可を頂けないでしょうか？」

「あの3機……ふむ……ま、いいでしょ。丁度戦場も煮詰まってきたみたいですし、ここらでフィナーレに向けて新たな役者を入れるのも」

そう言いながらアズラエルは端末を操作し、モニターに浮かび上がった人物に二言三言告げた。科学者然とした男は頷き、モニターから消えた。

「さて、それでじゃあ最終章の幕開けといきましょうかね、みなさん！」

くくくつと笑いながらアズラエルが放った悪意に満ちた言葉が粘りつくようにブリッジにいる全員に絡みついた。

- - - - -

「おらおらぁ！」

MS形態になっているエアマスター+GFCの砲撃が敵機を回避に専念させている。

「そこだぁ！」

回避する先を読んだガロードがすかさずGXDを駆り、上段に構

えたビームサーベルを振り抜き、敵の右腕をビームライフルごと切り落とした。

「そんじゃ、ドドメつと!」

機体のバランスを崩した敵に、高機動形態のレオパルド+GFBから放たれたミサイルが殺到し、一気に左足と背部のジェットストライカーをもぎ取っていく。

「敵半数撃破、残り10機の内3機は半壊、4機が戦闘続行不可能のためバリアを回収しながら下がっていきます!」

ティファの言葉通り、腕やら足、頭が欠けた敵機が宙に浮いているピンク色に光る球体を回収しながら下がっていくのが見える。

「意外とあっけなかったな。これじゃあ、リ・ホームと合流してもあんまり意味ないんじゃない?」

「何言ってるのよ。まだ6機いるんだから、ちゃっちゃと片づけて終わらせるわよ!」

高機動形態のレオパルド+GFBに乗っているロアビィの軽口を同じく搭乗しているエニルが窘める。

「でもさあ、ほんとにあっけなさ過ぎだよ。」

「ま、こちらガンダムタイプの上にパイロットがいいんだ。そんじょそこらの野郎に後れは取らねえよ!」

MS形態のエアマスター+GFCに乗るウィッツとパーラもすでに戦勝気分らしく、気楽に話している。

「待ってください……回収される機体と入れ替わりに別の機体が出てきました……これは……ガンダム？」

ティファが捉えた映像がすぐさまレーザー通信で各機体へと転送される。

「レイダー、カラミティ、フォビドゥン……前大戦時の機体を改修したものか……？」

機械全般に詳しいガロードが、送られてきたデータと以前目にしたことがあるデータと細部が違っていることに気づき、呟いた。

「なんでもいいぜ！ちょうど物足りなかったところだ。相手してやるぜ！パーラ、ドッキングアウトだ！」

「ちょ、ちよつと！？」

パーラの驚きの声を無視して、ウィッツはエアマスターをGFCからドッキングアウトして、戦闘機形態に変形。

「たつくもう、なんでそう血気盛んなのかねえ？」

「って、あんたもドッキングアウトしてるじゃない」

ウィッツの先走った行動に対して呆れた表情をしているロアビイも、いつのまにかレオパルドをGFBからドッキングアウトしていた。

「ま、どうやらあれで最後みたいだし、カッコイイところ見せる最後のチャンスなんでね。というわけで、あとの6機はよろしく！」

そう言い残し、バーニアを吹かしてレオパルドはエアマスターを

追走していった。

「まったくもう、あいつらは！」

パーラが悪態をついたのに対し、ティファが冷静に返した。

「たぶん、二人はあの3機のガンダムが危険だと感じたんだと思います。だから、自分たちが引き受けようと……」

「ま、そんなところでしょ。まったく、カッコつけたがりなんだから……」

エニルがため息交じりに呟く。

「ま、俺たちがちゃっちゃと残りの雑魚を倒して、ウィッツとロアビィの援護に行くか、母艦を叩けばいいって話だぜ！」

ガロードが気合を入れる掛け声をあげ、ディバインダーを構えハモニカ砲を残った敵へと向けた。

- - - - -

「ああ、めんどくさい……」

フォビドゥンを操るシャニ・アンドラスはMS形態から戦闘機に変形したエアマスターが撃ってきたビームをエネルギー偏向装甲『ゲシュマイディッヒ・パンツァー』で捻じ曲げ、あらぬ方向へと逸らす。

しかしその逸らしたビームはレオパルドと激しい射撃戦を繰り広

げているカラミティに当たりそうになる。

「てめえ、シャニイ！邪魔すんじゃねえぞ、こらあ！」

何とか回避したカラミティを駆るオルガ・サブナックがお返しとばかりにスキュラを放つが、それをフォビドゥンはまた捻じ曲げ、今度は猛禽類のようなMA形態で同じく戦闘機形態になっているエアマスターとドッグファイトを繰り広げているレイダーを狙う。

「シャニイ！つてめえ、この野郎！」

レイダーを駆るクロト・ブエルはエアマスターを追うのをやめ、機体をMS形態に変形させて破砕球『ミョルニル』をフォビドゥン目がけて放つが、それもあっさり躲かれその先に運悪くいたカラミティへとかすめた。

「クロト、お前も邪魔だ！」

カラミティがレイダーに容赦なくお返しのパズーカ砲を撃つ。

「おいおい、敵さん、一体何がしたいんだ？」

ロアビイが軽い口調ながらも信じられないというように呟いた。

「そりゃ俺のほうを知りたいぜ……ま、なんにしる仲間同士で潰し合ってくれるならそれに越したことはねえけどよ。こっちにとつたら時間稼ぎにもなるしな」

ウィッツも敵が敵に撃つ流れ弾に気を付けるといふ妙な状況に困惑して、積極的に攻撃できずにいた。

しかしその迷いによる躊躇いが致命的であったことを、突如遙か後方から起こった爆発により思い知らされた。

- - - - -

「今の砲撃はどこからだ！」

「真下からです！」

ジャミルの緊迫した声に対し、サラは衝撃で吹き飛ばされた体を端末の前まで戻し、慌てながらもなんとか答えを返した。

「被害状況は！」

「右翼機関大破！それ以外は……」

とサラが続けようとした瞬間、続けて巨大な赤い粒子ビームの奔流がフリーデンに向かって放たれ、左翼に直撃した。

「左翼エンジンも大破……」

「手すきのものに消火を急がせろ！」

「キャプテン、これじゃあ出力の半分も出せません！」

未だにメインエンジンは残っているが、そこを攻撃しないのは艦の中にある機体まで傷つけてしまうかもしれないからだろう。しかしメインエンジンが無事といっても、出力は30%以下までダウン。どう考えても逃げ切れる状態ではない。

「サラ、リ・ホームとの合流地点まであとどのくらいだ？」

「あと、5分ほどです！」

5分……ティファが最後に送ってきた情報によると、敵はガンダム3機を新たに投入し、さらにここで新手が来るとは……

（少し危ないか……？）

ジャミルの中で一瞬不安が心の隅に滲み出てきたが、すぐに追出し、思考をこの状況を打開する方法を探るのに費やし始めた。

- - - - -

「くそ、フリーデンが！？」

ガロードは突然の爆発とフリーデンと自分たちの下にいきなり現れた戦艦に一瞬呆然としてしまったが、炎を纏いながら失速するフリーデンを見てすぐさま転進しようとする。しかしそこで残り2機まで減っていたウインダムに行く手を阻まれる。

「ティファ、パーラ、エニル、あの戦艦を迎え撃ってくれ！ここは俺が食い止める！」

ハモニカ砲を撃った後、背部に装着しスラスタにし、代わりに右手にビームソード、左手にビームマシンガン構えたガロードは、ビームマシンガンで1機を牽制、その間にディバインダーによる大加速で一気に残りの1機に近づき、瞬く間にビームソードで両断した。

「わかったわ！」

「まかせときな！」

「気を付けて！」

ガロードが残りの1機をと戦っているのを尻目に、3機のGファルコンは新手の戦艦へと向かおうとしたのだが……！

「パーラさん、上に敵がいます！」

ティファの慌てた声に咄嗟に桿を横に切ったパーラは、1秒前まで自分の機体があったところに赤い粒子の閃光が駆け抜けるのを見た。

「な、なんだあ！？」

パーラが急速転回しながら上に目を向けると、そこには新たに3機の機体があった。

1体は巨大な実大剣を手につオレンジ色をした近接型、残る2機は巨大な砲門を構えた黒い機体と、その後ろで砲門を支えるかのようにもう1機赤いのがいる。そしてその3機はどれも背部から赤黒い粒子を放出している。

「GN粒子……ソレスタルビーングか……！？」

「ライブラリ照合……あれはスローネアイン、ツヴァイ、ドライです！」

ティファの報告はその場にいた全員に衝撃を与えた。

ソレスタルビーング……1年ほど前から戦争根絶を謳って所構わず武力介入している私設武装組織で、ほとんどの国や組織にとってはテロリストと捉えられている。

このソレスタルビーングの特徴は、核やバッテリーに代わる新しい機関、GNドライブなるものを機体に搭載していることだ。GNドライブはGN粒子という特殊な粒子を生み出し、信じられないような機動性と高出力の火力を発揮する。しかしその性能は大部分が今を持って謎に包まれており、各組織はこぞってこのGNドライブ搭載機、ガンダムを狙っている。

半年ほどは4機のガンダムが武力介入を行っていたが、ある作戦を切っ掛けに新たに3機の機体が参戦した。しかし後からの3機が所属するチームは前者とは方針が違うらしく、それまで極力民間人に被害が出ないようにしていた前者のソレスタルビーングと違い、後者の方は戦争と関係するところを手当たり次第に破壊を繰り返している。

そして今頭上にいる3機は後から参戦した機体、つまり民間人だろうが中立組織だろうが問答無用で潰しにかかる厄介な相手というわけだ。

ガロード達を狙った1撃は警告だったのか、ライフルモードを解除した隊長機らしき機体が前に出た。

「こちらはソレスタルビーングのトリニティだ。ジャンク屋所属艦フリーデンに告ぐ。そちらの艦が回収した機体を速やかにこちらへ渡してもらいた。譲渡を拒んだ場合には実力行使させてもらう。またそちらの艦隊も、例の機体はそうそうに諦めて帰還することをお勧めする」

オープン回線から聞こえる若い男の声が淡々と言いたいことだけ言って、沈黙した。

「……で、どうするんだい？」

一時的に硬直した戦場の中、エニルが誰に尋ねるでもなく呟いた。

「たぶん下の艦は彼らの母艦です。今の戦力では目の前の敵に加えて上下の攻撃を食い止めるのは難しいです……」

「じゃあ、あいつらを差し出せっていうのかよ！」

ティファの答えにパーラが憤って荒い声を上げるが、それに返せる言葉は誰も持っていなかった。

「ちくしょう、ここまでなのか！」

ガロードが操縦桿を握る手を強め、悔しさに歯を食いしばったその時！

「諦めるとはらしくないな、ガロード・ラン」

静かな声が遙か頭上、トリニティのさらに上からし、青い機体が閃光のようにロングレンジ用の砲門を装備した機体到大剣で躍り掛かるのが見えた。

「っこのやる！」

すかさず大剣GNバスターソードを持つオレンジ色をした機体之間に割り込み、大剣どうしがぶつかり合い激しい鏖迫り合いを繰り広げる。

「ガイ！？」

「遅くなってすまない」

短く謝罪の言葉を述べ、ガイは愛機アストレイブルーフレームS

しを一旦オレンジ色の機体スローネツヴァイから離し、タクティカルアームズを大剣からガトリングフォームにして牽制に弾丸をばら撒き、敵をその場に留める。

「ちくしょう、調子に乗りやがってえ！ いけよ、ファンゲー！」

オレンジ色の機体の腰から6つの小型の物体が飛び出し、先端に赤い粒子を纏わせながらブルーフレームに殺到する。

凱はタクティカルアームズを背後に装着し直し、脚にしまわれていた耐ビームコーティングされたアーマーシュナイダーを操りビームを弾く。

「ガイ、下がって！」

さらに、遅れてデブリの影から現れた所々赤い塗装がしてある頭部にトサカの代わりにバスターソードが装着されたジンが、小型誘導兵器ファンゲに牽制のマシンガンを乱射した。

「イライジャも、来てくれたのか！」

「おっと、俺も忘れてもらっちゃあ困るぜ！」

いきなり目の前を巨大なデブリが通り過ぎ、GX Dと近くで睨み合っていたウインダムにぶち当たり、遠くへと吹き飛ばした。

「レッドフレーム……ロウ！」

「待たせたな。間に合いそうになかったから、MSだけでデブリを抜けて先に来た！ もう少ししたらリ・ホームも到着するぜ！」

ロウは言い終わると同時にレッドフレームパワードレッドを駆り、「おりゃー！」と気合の掛け声を上げながら手近にあるデブリ

をパワーシリンダーが生み出す馬鹿力で次々に掴んでは投げてデブリの嵐を敵の艦に浴びせる。

慌てた目の前と下にいる3つの艦は回避運動をとるも、いくつかの砲台や外装が破壊され閃光を生みだした。

「よし。あたしらも畳み掛けるぜ！」

しかしそのパールの気合いの声は、フリーデンで起こった新たな爆発によって遮られた……

- - - - -

「今度はどこからの攻撃だ！」

突然艦を襲った衝撃に耐え、ジャミルは艦長席にしがみつきながら大声を張り上げた。

「外部からの攻撃ではありません！内部から、ハッチがビームで破られました！」

「なんだと!？」

（工作部隊が乗り込んでいた……? いや、それならまずはじめにブリッジを狙うはずだ。なら……?）

「フェ、フェニックスガンダムが発進しました！」

「何!？」

「フェニックスガンダム、応答しろ!誰が乗っている!」

「……や……た！」

「キッドか！どうした、格納庫でなにがあつた！？」

砂嵐が吹きあれる画面の向こうで、キッドの声がだんだんはつきりと聞こえてくる。

「……やられた！あの女の子だ！あの子がいきなりノーマルスーツを着て格納庫に入ってきて、フェニックスに乗ってつちまつた」

「そんな、ありえない！彼女は少し前まで起き上れる状態じゃなかったのよ！」

サラが驚きの声を上げるが、その驚きはキッドの次の発言でさらに大きくなる。

「さらに悪いことに、あのガンダムばーやも一緒に乗ってつちやつたんだよね……」

「なんですって！？」

「それじゃあ、あの子も共犯ってこと？」

トニアの問いに対し、やっと画面が復旧したモニターに映ったキッドが首を横に振った。

「いや、丁度機体のロックを外そうとあのばーやと一緒に色々いじってたら、あの子がふらりとやってきて、メインシートに座ってたおいらを放り出してそのまま出ちゃったんだ」

「つまり、あの子はただ巻き添えを食っただけってこと？」

「そうみたいだね。とにかく、こっちはゲートを応急修理するから、あの機体のことはそっちに任せたよ！」

そう言い残し、キッドは画面から姿を消した。

「でも、なんで逃げ出したのかしらね、あの子?」

トニアの誰にするでもなく口にした疑問は答えられることなく、
アークエンジェル級が放ってきたローエン格林を避けることで再
びフリーデンは戦場へと心を戻した。

- - - - -

「おい、ほのか!聞いてんのかよ!早くフリーデンに戻るんだ!」

戦闘が始まって以来、キッドとスザクは何とかフェニックスを起
動させようと悪戦苦闘していた。するとほのかがひょっこり現れた
のだ。

そしてスザクがよかった……と、安堵する暇もなく、いきなりメ
インシートに座っていたキッドを放り投げ、自分がそこに座ってし
まった。

スザクは慌てて席を立とうとしたがすでに遅く、ほのかは俺とキ
ッド達がいくらやってもできなかった機体の起動を一瞬で行い、ピ
ームライフルでゲートを破壊し、宙へと飛び立ってしまった。

「くそ、回線が繋がってないのか?」

端末を操り、何度もAccess Denied（操作拒否）を喰
らいながらも、何とかメインシートとの回線を繋ぐことができた。

「……な……きゃ……に……」

「なんだ……おい、ほのか！なんだって？」

回線が通じてしばらくすると、だんだんほのかの何かを言っているのが聞こえてきた。

「……逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ……！」

「ほ、ほのか！？」

ほのかの憑りつかれたかのような声に俺は気圧され、スザクは体を動かすことができなくなる。そして、その後の彼女の行動も、ただ見ていることしかできなかった……

- - - - -

「な、なに……あれ？」

ティファはフリーデンから飛び出してきた機体、フェニックスを見て心が芯から凍りつくような恐怖を感じさせられた。いや、与えられたというより、共有したと言ったほうがいいのかも知らない。

ティファのニュータイプとしての能力が、フェニックスに乗る誰かの今の心境を感じ、同じ気持ちを味あわされているのだ。

「いけない……彼女をこのままにしちゃ！」

ティファはGFAを駆り、虚空に佇むフェニックスへと向かった。

「ティファ？」

ガロードがティファの行動に気づき、一瞬戦線を離れようとしたが、すぐにドレイク級が放ったミサイルの対処へと奔走させられてしまい、追いかけることができなかった。

「いったいどうしたん……なんだ、あれは？」

ミサイルをすべて撃墜した後、ティファが向かった方へと目を向けると、彼女が向かう方向に、戦闘が始まる前にキッドと何とか調べようといじっていた機体が戦闘機形態で浮かんでいるのが見えた。

しかし、ただ浮かんでいるわけではない。あの機体の特殊兵装、フェザーファンネルが、まるで巨大な円を作るかのように不気味に佇んでいる。

そしてティファの「だめー！ー！」という声が耳元で響いたと同時に、その円の中心に黒い、全てを吸い込んでしまいそうな闇が生まれた。

- - - - -

「な、なんだよ、これ？」

スザクは目の前に現れた黒い霧の様なものを呆然と見ていたが、ほのかにそれに向かって機体を進めだしたことによって、ぞつとしたものが体を駆け抜けた。

ニュータイプやら覚醒者の超感覚ではない。ただ、生きるものすべてが持つ原始的な危機察知能力が今フルになってスザクの体全体、

細胞のひとつひとつから警告する。

『あれはまずい!』、と……

「ほのか、おい!聞こえてんだろ!頼む、引き返してくれ!」

スザクの懇願とも聞こえる声に、しかしほのかはまったく無反応で、ただ「逃げなきゃ……」と呟くばかり。

そしてフェニックスがフェザーファンネルが作り出している闇に触れそうになったその瞬間!

ドーーーーーッ!

一筋の黄色い閃光が闇を切り裂き、フェニックスガンダムを吹き飛ばした!

「な、なんなんだよ、こんどは!?!」

スザクが慌てて後方のモニターを呼び出すと、そこには新たな機体が映し出されていた。

戦闘01（後書き）

Gファルコンのヴァリエーション（AWCAS / Boost / Combat）は今作オリジナルです。

改造好きのキッドやロウが所属するジャンク屋ギルドなら、必ずGファルコンも色々なタイプを作るだろうと思い、実装してみました。また、今作の主人公機、フェニックスガンダム0-2ndはフェニックス・ゼロとフェニックスガンダムの中間機という扱いです。

更新は今月中にはできると思いますので、気に入っていただけたらまた読んでください。

戦闘02

「あれは、Wガンダム……？」

艦長席に座るナタルがモニターに映っている2機、白と赤のコントラストが派手な機体を、新たに現れた白と所々青と赤に塗られ、鳥のような形をした戦闘機が攻撃しているのを啞然としたように見つめている。

「ほう、あれが例のテロリスト達の所持する機体ですか……」

アズラエルがモニターに映る機体を興味深げに眺めながら呟いた。
あなたの御同類ですね……という言葉を呑み込んだナタルは、アズラエルの方へと顔を向けた。

「この状況では任務続行は厳しいと思うのですが……」

「ま、ここはもう撤退してもいいでしょう」

いかがいたしましょうかと、続けようとしたナタルの言葉はアズラエルの意外な発言に遮られた。

「よろしいのですか？」

てっきりまた嫌味をネチネチ言われるかと思っていたナタルは、少し驚いたように尋ねた。

「ま、今回の1番の目的はあの機体が本当にさっき言ったような性能を持っているのかでしたしね」

アズラエルは手元にある端末を操作してモニターに先ほどフェニックスガンダムが作りだした闇を映し出した。

「これが見れただけでも、今回は良しとしましょう。それに……」
「それに……？」

ナタルが形式だけ尋ねると、アズラエルはニヤツと笑った。

「このまま戦いが推移すれば、こちらがあの機体を捕獲しやすくなりそうですからね」

そう言いながらアズラエルが見た先には、暗い宇宙では太陽の次に眩いばかりに明るい青い星、地球があった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「な、なんなんだよ、もう……勘弁してくれよ!？」

思わず泣きごとのような言葉を漏らしたスザクは、人型に姿を変えたフェニックスを操縦し、新たに現れた敵から唯ひたすら逃げていた。

ファンネルを巨大なビームで吹き散らかされたと同時に声を途絶えさせたほのかは、未だに意識はあるようだが動けないようで後ろから敵が第2射を撃つてもなされるがままで、機体を動かす気配がまったくみられなかった。もし、スザクが人型時に操縦できたことをとっさに思い出し、なおかつ運よく一発で変形させられなければ、お陀仏だっただろう。

あの恐ろしいほど巨大なビームライフル（いや、確かあれはバスターライフルと言ったっけ？）も弾の温存の為かあれから撃ってこないの、一瞬で蒸発させられることはなさそうだが、それでも追われていることには変わりなく、今も相手は牽制のマシンガンを撃ちながらどんどん近づいてきている。

「クソッ！」

スザクは機体に搭載された優秀なAIのランダム回避に助けられながら、なんとか弾幕を避けながら前へ前へと進んでいたが……

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

「な、なんだ！？」

いきなり鳴り始めた警報に呆気にとられたスザクは、今まで穴があくほど睨んでいた後方の映像から前方の映像へと目を向けた。

「しっ、しまった……！」

スザクの眼前には青い星、地球が広がっていた。

- - - - -

「相手は素人が……？」

Wのコックピットに座るヒロ・ユイはマシンガンを撃ち続けな

がら呟いく。

今回の任務は新型モビルスーツの撃墜。いつもと同じ通常の任務だ。他勢力が介入しているのはイレギュラーだったが、それもないことではない。AIに頼りっきりのランダム回避も、やりやすい相手というだけだ。

なのに……

「なにか、気になるな……」

数多の作戦を遂行してきたヒイロだからこそ嗅ぎ取った予感。目標が持つ力が今ここで潰しておかねばならないものだという警告を直感から得たヒイロは、真っ直ぐな瞳を目の前でフラフラ地球に向かって飛ぶ機体へと向けた。

「お前を、殺す……」

その言葉が聞こえたかのように、標的はさらにスピードを上げた。

- - - - -

「まずい、このままじゃ地球に墜ちちまう!？」

スザクは今まで警告に気付かなかったことを齒ぎしりしながら悔いたが、後ろから攻撃されていたのでは前が疎かになるのは素人なら当たり前のことだ……と、頭の中の変に冷静な部分がツツコミをいれてきたが、今はそんな今更な上にどうでもいいツツコミよりも

……

「クソッ！引つ張られる！？」

前は地球（つていうか、この機体単独で大気圏突入できるのか？……スベック上はなんとかできるみたいだけど……）後ろは敵と、このとんでもない状況をなんとかできる案を探したが……

「そんなの、都合よく見つかるかあああ！？」

所詮素人、ここまで逃げられたのが運が良かったのだ。そして、その運すら……

ドーーーーーンッ！！

「うわぁー！？」

機体に衝撃が走る。スザクが衝撃でヘルメット内でシェイクされた頭をなんとかモニターに向けると、そこには右翼の先が砕け散っている姿だった。こんな状態じゃあ大気圏突入すら……

ガクンッ！

ビーツ！！ビーツ！！ビーツ！！ビーツ！！

先ほどよりさらに大きな音で鳴り響いた警告音に急かされモニターを見るスザク。

「うつ、ウソだろ……？」

そこには重力に捕まり、脱出不可能という文章が淡々と書かれていた。

- - - - -

「地球に降りる……いや、墜ちるか……」

相手の片翼に大ダメージを与えたヒイロは、すでに地球の重力に引かれて満足に動くこともできない目標に向けてバスターライフルを構えた。

「任務、完了……」

ヒイロの淡々とした言葉と共に、バスターライフルが撃たれようとしたその瞬間！

「何！？」

後ろからの敵襲を知らせる警報より一瞬早く敵の殺気を感じ取ったヒイロは、機体を人型へと変形させながら後ろへと向け、盾を構える。その瞬間、いく筋ものビームが宇宙に浮かぶ塵を焼き、ピンク色の線を引きながらWガンダムへと殺到した。

「やらせるかよ！」

オープン回線で入ってきた声の主が駆る機体は、今回の任務に介入している勢力の内の一つ、ジャンク屋に所属するG×の改良型とその支援機、GFだった。

- - - - -

「ガロード、ドッキングアウトするね」

ティファは言うが早く、GFAをGXDからドッキングアウトした。

「ティファ、どうするつもりだ？」

すでに地球の重力に捕まっている二人を救う方法は一つしかない
と知りながら、ガロードは尋ねた。

「私が行って、助ける……」

一瞬画面越しで二人の間に無言のやり取りが行われた。そして……

「そっか……じゃあ、俺があいつを足止めしとくよ。気を付けて！」

「わかった。ガロードも……！」

二人はそれだけ言うと、ガロードはWガンダムへ、ティファはフ
エニックスを追った。

- - - - -

「クソッ！クソッ！！ちくしょーっ！！！！」

スザクは画面を真っ赤にして警告を放つモニターに、思いつきり

拳を叩きつけた。軍事製品だけあって、半端なく丈夫に作られており傷一つつかず、逆に拳が痛んだが、そんなのはどうでもよかった。どちらにしろ、このまま大気圏で燃え尽きれば痛みなんか関係なくなる……

「もう、駄目なのか……」

思えば悔いの残りまくりの人生だ……こんなんじゃ、こんなんじや……！

「死ねるか……！」

「じゃあ、生きる努力をしましょう！」
「へっ？」

スザクの渾身の叫びに誰かが答えた。それは……？

「ティ、ティファさん！？」

大気圏突入時に起こる激しい摩擦で目の前が赤くなったモニターに、前回漂流中に助けてくれたGファルコンがいた。しかし、前の時と違いパイロットはパラではなくティファさんのようだ。

「今から大気圏突入の為にドッキングします。相対速度を合わせるので、何もせず、操縦はこちらにまかせてください」

「えっ、あの……えっ？」

スザクは突然降って湧いてきた生き残れる可能性に俺が戸惑っている間に、ティファはあつという間に機体をドッキング、その後滑らかな動きで機体の角度を固定した。

気が落ち着いてくると、体にかかる圧力が今さらのように激しく

襲いかかる。

「降りる地点は……このまま行くとオーストラリアのエアーズロック付近になりそうですね……」

「エ、エアーズロック？」

（確か、地球のへそだっけ……？）

「ちよつとやつかいんだけど、最悪ではないです……とりあえず、もう少しだけ辛抱してください」

「は、はあ……」

スザクは言われるがままに重石のようにのしかかる圧力とノーマルスーツ越しにも伝わってくる熱に耐えながら、だんだんはつきりしてきたモニターに映る地球へと目を吸い寄せられていった。

地上

「あちい……」

屈むようにしているフェニックスのコックピットから這い出たスザクは、無風の中照りつける殺人的な日差しと、人間という水分の塊にたちまち引き寄せられてきた小蠅の大群に閉口しながら、近くに設置されている簡易テントに急いだ。

遙か遠くにはほとんど何もない不毛な大地の先に蜃気楼のように輪郭をぼやかせながらも、地球のヘソと呼ばれる巨大な一枚岩のエアーズロックが見える。

ここに降り立ってからすでに何回も見ているが、その圧倒的な存在感にはいつも目を引かれるものがあるが、今はテントに急ぐ。

スザクはテントと隣接させて待機しているGFAが展開する超高効率のソーラーパネルの発電状況を確認した後、テントの入口を開け、中に入ってから一度戸を閉め、改めて中にあるもう一つの扉を開けた。

「ふう、生き返るう……」

中は冷房がそこそこ効いており、まさに内と外では天国と地獄。そんなことを思いながら、スザクはテントの一角に設置された簡易型冷蔵庫から水の入ったボトルを取出し、コップに慎重に注ぐ。

水は1週間分+近くにある植物（サボテン等）やら夜間に集められる若干の水蒸気が数日分と、あまり余裕はない。なので、一人が1日に飲む量はきちんと決められている。

「お疲れ様。機体はどうだった、スザク？」

「あつ、ティファさん、お疲れ様です。やっぱり駄目でした。なんで動かないのかもさっぱりです……」

テントに備えられている通信機器の前に座って何とかジャンク屋組合に連絡を取るうとしていたティファの問いに、スザクはお手上げというように手を掲げた。

「で、ほのかは……」

スザクは諦め半分で言いながら、通信機器の置かれた場所のすぐ近くにあるベットに歩み寄る。

「まだ、ダメみたい。たぶん、専門の医療機関でないと……」

ティファの言い淀む声を聞きながら、スザクはベットに横たわるほのかを見下ろし、顔にかかった髪にそっと触れて整えた。

- - - - -

地球に降下してから、すでに3日が経過している。

スザク達が墮ちた場所は旧オーストラリアのほぼ真ん中、世にも有名なエアーズロックのすぐ近くだった。

着陸し機体を分離した後も、スザクは大気圏突入時の疲労と久しぶりに感じる地球の重力で一時動けないでいたが、何とか体を動かして這い出し、ほのかのところまで行きコックピットの外に連れ出した。

すでに夜中で辺りは真っ暗で目が慣れるのに時間がかかったが、

見ることできたほのかの寝顔はあの半狂乱が嘘だったかのように穏やかなものだった。

その後、ティファの華奢でインドア風な外見に似合わない手際の良さでG F Aから仮設テント、各種器具等を取り出し（G Fシリーズは単独でガンダムを運用する目的で作られたため、移動時の必需品も内蔵されている）スザクにテキパキと指示を出して瞬く間に設置を終えてしまった。

しかし、その後が問題だった……

ここ旧オーストラリアにはNジャマーが設置されている。Nジャマーとは核分裂を阻害する機械で、地球上のいくつかの地点に設置されているのだ。

名目上は、世界規模の核戦争の勃発を防ぐために世界各地にバランス良く配置しているとされているが、勿論裏の理由もある……と言われている（外交上の問題や、軌道エレベーターを守るため等）まあ、そんなことは一般人のスザクの知るところではない……というよりも、今までは自分と全く関係がないことだった。

しかし、ここで一つ問題なのがNジャマーの副産物、電波の阻害だ。

テントを設置してひと段落ついた後、ティファはジャンク屋組合に連絡を取ろうとしたが、この電波妨害のせいで通信は完全に不能もちろん、フリーデンがスザク達の落ちた角度や方向を観測しているだろうから、だいたいの場所は予測でき、今も地球に降りてきているか、もしくは地上のジャンク屋に救援を要請しているだろう。

しかし、ほのかの容体や水や食料の備蓄が残り少ない今、受け身の姿勢でいるのは以ての外……というわけで、ティファはなんとか

通信を試みようとしていた。

- - - - -

「なかなか難しいですね……」

夜の闇の中、パチパチツ！と火花を散らす焚き火をボーツと見ながら、スザクは自分のすぐ隣に座る少女、ティファに話しかけた。

「大丈夫。絶対に助かる」

ティファはそう言いながら、今現在燃えている焚き火の横にあるすでに火が消えている焚き火跡の余熱で両手で一本づつ持った枝に刺して温めていたマシユマロのうちの一つをスザクの前に差し出す。

「あ、ありがとうございます」

スザクは軽く頭を下げ枝を受け取り、マシユマロを口に入れる。マシユマロは口に入れた瞬間トロツと舌に溶け、口の中が甘味で満たされる。

「こっちも、そろそろいいかな……？」

さらに、ティファはマシユマロを温めていた焚き火跡の灰の下からアルミホイルで包んだ球形のものをマシユマロを刺していた枝で掘り出す。

「……うん、良いみたい。はい、これを付けて」

渡された厚手の手袋をつけ、灰の中で温められたアルミホイルの包みを慎重に解くと、中から甘い香りが溢れ出す。

「焼きリンゴ。熱いから気をつけて」

夕食の時に使ったフォークで慎重に切り分け、口に入れるとリンゴ本来の甘さと、それを邪魔しない程度に砂糖等の援護があり、まさに絶品となっている。

「にしても、何度見てもすごい光景ですね」

スザクはリンゴの蒸し焼きに舌鼓を打ちながらも、真上に広がる星の輝きと開放感、そして夜の闇と空に広がる今にも吸い込まれそうな宇宙に言いようもない恐怖のようなものが内から湧き上がり、さらに心が躍るのを感じた。

「スザクは地球生まれじゃないの？」

「あ、ああ、はい。俺は日本の東京で生まれ育った後、親の都合でコロニーを転々としてましたから、こういう景色を見るのは初めてなんです」

スザクがしんみりしていると、ティファが僅かに微笑む。

それを見たスザクは若干ドキツとした後気まずくなって、ティファに問い返す。

「ティファさんはずっと宇宙にいるんですか？でも、それにしては地上でのこういうサバイバルに慣れてるみたいですし……やっぱりジャンク屋って地球、宇宙問わずって感じなんですかね？」

ここで、喋りながらもスザクはふと疑問に思った。なんで、ティファさんはジャンク屋に所属しているんだろうか？

しかし、その質問の気配を察したのか、ティファが先に話し出す。

「そうね、こういうサバイバル生活はガロードと二人だった時によくしてたから、必然的に覚えちゃった」

僅かに悲しみを含んだような笑みを浮かべながら、ここではないどこか遠くを見るような目をしたティファに、スザクはそれ以上のことを尋ねることはできず、ただ黙々とリンゴを食すことにした。

地上（後書き）

久しぶりに更新しましたが、奇しくも先日公開されたユニコーンの舞台も砂漠でしたな（オーストラリアのは厳密には砂漠ではありませんが……）

次回はついに新たな登場人物達がそれぞれの部隊を引き連れて現れます（X系だけだと俺得にしかないと思うのでw）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2063p/>

Gundam Generation Novel -不死鳥の描く軌跡-

2011年11月20日16時42分発行